

ような青空が広がっていた。

正午を間近にして、調べが調子を変える。

シエルツとザックのふたりは、巫子の披露目を見届けるために、広場へ向かった。

集落中の人々が集まっているというのに話し声ひとつなく、笛と鳴子の調べだけが続く。皆、固唾をのんで巫子を待っていた。

きたる冬を無事に越すために、捧げる命。

今年も、外からもたらされた特別な存在だと、皆が知っていた。

やがて、館の門が開いた。  
御簾みすをかけられた輿こしが現れる。

複雑な組み木で作られた輿には装飾が彫られ、赤を基調に美しく彩色されていた。輿は灰色の長衣姿の神官たちによって静々と運ばれ、門の前に作られたやぐらへと据えられた。

ふたりの神官が、輿の両側からゆつくりと御簾を上げる。広場中から、感嘆と安堵の溜息があがった。

輿に鎮座していたのは、間違ひなくエレだった。

白い薄布に、赤が基調の刺繍がほどこされた衣装に身を包んでいる。顔と袖からのぞく手には、赤い顔料で文様が化粧されていた。

巫子は、慈愛すら感じさせる穏やかな微笑をたたえてい

る。人々の感嘆も当然の美しさだった。この地の人々が望むとおりの巫子の姿を、エレは申し分なく体現し、努めている。

神官たちの合唱による祈りが始まると、皆一斉に頭を垂れた。

その時、群衆をはさんで、輿のなかの巫女と傭兵たちの視線が重なる。

エレが、ふたりに向かって笑った。

遠慮がちではにかむような、エレのいつもの笑顔。

それは、人間としての最後の笑みだった。

少女は巫子の微笑に戻り、集落の人々へと静かに向きなおる。

そのあと、巫子と傭兵たちの視線が交わることはなかった。

披露目が終わった広場では、人々の不安まじりのぶしつけな目が、シエルツとザックにそそがれていた。ここから先は、招かれざる客だ。

長との約束どおり、ふたりは村をあとにする。

足なみを馬にまかせて、ゆつくりと山を降りはじめた。昨日、エレとともに来た道だ。

これで、農夫から受けた仕事は終わった。

結果として、少女をフェランの修道院へ連れていくこと